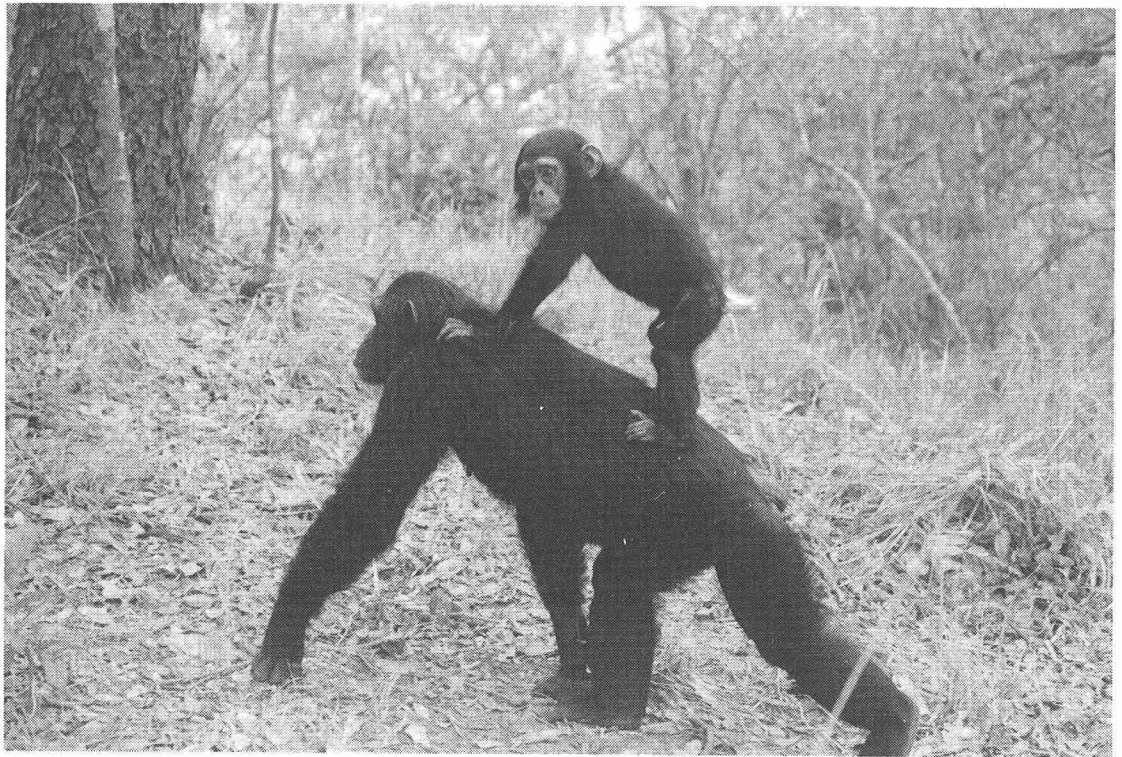


報 廣

東京大学理学部



目 次

表紙説明	1
向山光昭教授恩賜賞・日本学士院賞受賞奈良坂紘一	2
植村泰忠先生の学士院賞受賞.....上村 洸	3
小林英司名誉教授の学士院賞受賞によせて江上信雄	4
植物園の2月半.....岩槻邦男	5
理学部長と理学部職員組合の交渉.....	6
学部消息.....	7

表 紙 説 明

東アフリカ、タンガニイカ湖畔に、「マハレ山塊野生生物研究センター」がある。現在は、タンザニア政府の「セレンゲティ野生生物研究所」の管轄下にあるが、もとは日本人研究者が建設した調査基地から発展したものである。今も研究自体は、東京大学人類学教室生態人類学研究室と、京都大学動物学教室人類進化論研究室によって推進され、野生チンパンジーの長期観察がすでに17年以上つづけられている。

写真のチンパンジーの母親は、調査当初ほぼ7才の娘だった。彼女は16才で初産をむかえた。写真をとったのは、この息子が2才半のときである。残念なことに、この子は6才のとき病死した。

一頭の雌が一生の間に、大人になるまで育てあげることのできる子供の数は、平均2頭強である。それゆえ、自然増加率はきわめて低く、環境破壊に直面している類人猿の保護は、緊急の問題である。

人類学教室

西 田 利 貞

向山光昭教授恩賜賞・日本学士院賞受賞

奈良坂 紘 一 (化学)

昭和58年度恩賜賞ならびに日本学士院賞が、向山光昭教授の「有機合成化学の新手法開拓と生体関連物質の合成研究」に対して贈られた。心からお慶び申し上げる次第である。向山教授のことは理学部バレーボール大会、サッカー大会で御存知の方も多いと思いますが、編集委員会の依頼により、この機会に業績や研究の特色を簡単に紹介させていただきます。

教授の研究は、多くの独創的かつ基本的な有機合成反応を開拓し、さらにこれらの反応を活用してペプチド、核酸類、ビタミン、テルペン類、糖質化合物など、広い範囲にわたる生体関連物質の合成に成功しその有用性を示したものである。絶えず新分野にチャレンジする姿勢は、独創性の高い研究にあらわれ、世界におけるこの分野の先導的役割を果たしておられる。

向山教授は、東京工業大学故星野敏雄教授のもとで有機化学の研究を始められた。最近、議義、講演会などで「^{しん}・^{しん}・^{しん}深=新なり」という言葉をよく口にされる。これは、「^{しん}・^{しん}・^{しん}深=新なり」すなわち、「深く考え、とことん研究に打ちこめば、必ず独創的な新しい研究が生まれてくる」という星野教授の考えの上に、さらに「仕事には自信を持って当れ」という意味をこめたものであり、向上教授の研究姿勢がよく表わされている。

昭和23年東京工業大学を卒業後、特別研究生として、尿素、ウレタンの熱解離反応の機構に関する研究を始めた。昭和28年、学習院大学に招かれた折、たまたま熱分解反応の試料を合成している際、ある誘導体が従来法では合成できず、思いがけない生成物が得られたことを追求し、ニトロアルカンからのアルキルニトリルオキシドの生成という新しい脱水反応を見出した。当時、有機化学の

分野では、天然物化学、有機反応機構に関する研究が活発で、合成反応の開拓研究は、質量とも今日とは比べものにならなかった。向山教授は、この反応の発見を契機として、いち早く合成反応の開拓研究の重要性に着目し、以後新しい合成反応の開拓を主題とする研究を展開してこられた。

昭和33年東京工業大学にうつられ、引き続いて脱水反応の研究を進めている過程で、新しい形式の重合反応である開環1,4-付加重合反応を見出した。また従来有機合成化学の最も基本的な反応の一つである脱水縮合反応は、2分子から H_2O を〔H〕と〔OH〕に分けてとる形式で進行するものが一般とされていたのに対し、向山教授は酸化還元の方法を導入した全く新しい型式の脱水反応を開拓した。この反応は、“Oxidation-Reduction Condensation” とよばれ、トリフェニルホスフィン還元剤2,2'-ジピリジルジスルフィドを酸化剤として用いる温和な条件下で進行する脱水縮合反応として広く利用されている。先のニトリルオキシド生成反応と同様にこれらの反応を見出すきっかけは、実験を通じて予期しない現象を観察したことであった。教授は、このような自らの体験から、実験を通じて得られるヒントを非常に大切にしてくられ、一つ一つの実験から必ず何か新しい活きた知識を把握し、次の研究の糧とするよう、若い研究者についても説いている。

向山教授は、昭和48年東京大学理学部へ転任しはじめの二年間は東京工業大学と兼任であったため、一日のうちに東大、東工大の研究室を往復する多忙な毎日であった。この研究に打込む情熱とバイタリティーには周囲のものが皆感服させられた。これも「若い研究者とできるだけ一緒にいる

ことが、一番の思いやりである」との考えによるもので、現在も必ず毎日実験室に顔を出しディスカッションを欠かさない。

教授は、3年～4年毎に研究テーマを変え、絶えず新しい分野の開拓にチャレンジしている。チタン化合物を用いる一連の骨格形成反応の開拓は、これまで有機合成化学に殆んど用いられることのなかったチタン化合物が、従来困難とされた酸性条件化の反応のコントロールにルイス酸として非常に有用であることを示したものである。教授の研究を契機として、ここ数年のうちにチタン化合物が一般性の高い試薬として極めて頻繁に利用されるようになっていく。また温和な条件下で進行する脱水反応剤として、2-ハロピリジニウム塩をはじめとする一連の含窒素芳香族化合物のオニウム塩を開発した。さらにポリルトリフラートを用いるアルドール反応の開拓は、先に述べたチタン化合物を活用するアルドール反応とともに、その後改良アルドール反応の世界的なそして爆発的な研究を促した価値ある業績である。最近では、より有効なアルドール反応として、低原子価スズを用いた高立体選択的、また不斉アルドール反応の開拓にも成功している。これらの反応は、従来

困難とされていた非環式化合物の立体選択的合成に有効な手法を提供したものであり、複雑な天然有機化合物の合成戦略を一変させた。

現在、向山教授は反応の中間状態をコントロールすることによって、合成反応における高選択性を実現させ、さらに反応をエントロピー的に有利に行わせるという“Synthetic Control”という考え方を提唱し研究を展開している。簡単な金属化合物と官能基との相互作用をコントロールの手段として導入し、高い選択性をもつ数々の不斉合成反応の開発に成功するとともに、立体選択的合成が難しい非環式化合物、とくにポリオール類の立体選択的合成手法の開拓を行っている。さらにこれら反応を活用して、簡単な出発物質から糖質化合物を合成することに現在意欲を注いでいる。

「人の後を追いかける研究は浮草のようなものである。しっかりと河底に根を張って育ち続けるような自らが産み出した独創的な仕事に挑戦すべきである。」という言葉が向山教授の研究への信念であり、おそらく教授の頭の中では次の新しい分野へのチャレンジが始まっていると思われる。これからますます研究を続けていただきたい。

植村泰忠先生の学士院賞受賞

上 村 洸 (物理)

名誉教授の植村泰忠先生が、お弟子の安藤恒也氏 (筑波大物質工学系助教授) とともに、本年度の学士院賞を受賞されました。「強磁場下のMOS反転層における伝導現象の理論」が受賞テーマです。長年先生の研究室と研究活動をともにしてきました私にとりまして、このニュースは誠に嬉しく、すぐれた直観的アイディアと並々ならぬバイタリティで、常に世界におけるこの分野の研究

でリーダーシップを発揮してこられた先生に、心から“おめでとう”を申し上げます。

植村先生は、1982年4月1日に東京大学を停年で御退官になり、現在は東京理科大学理学部応用物理学教室にお勤めですが、東大在職中は理学部長、総長特別補佐として理学部発展のために尽力されたことは私どもの記憶に新しいところで、先生については今更紹介するまでもないと存じます。

ここでは今回授賞のテーマとなりました先生の御研究について簡単に紹介させていただきます。

シリコン等の半導体に絶縁体酸化膜を蒸着し、それに金属電極をつけた金属—酸化膜—半導体(MOS)接合で、例えば半導体がP型の場合に半導体側を負、金属電極が正になるように電圧をかけますと、半導体の表面近くに伝導電子が現われます。このように伝導にあずかる担体の極性がバルクの半導体(P型では正孔)と反転したものを反転層とよびますが、この反転層の厚さは電子の量子力学的波長と同程度になるために、表面に垂直な方向の電子の運動は量子化され、電子は表面に沿って自由に動く2次元電子となります。

このような反転層の表面に垂直に磁場をかけますと、表面に沿った自由な運動も完全に量子化されて不純物が存在しない純粋な系では電子は全く動けなくなります。

このように完全に量子化された特色をもつ電子系について伝導現象の理論をつくり上げたのが植村先生と安藤さんです。1970年代の初め当時植村

研究室の大学院学生であった安藤恒也さん、松本幸雄さん(現国立公害研究所所員)にこの問題についてテーマを出されたのがこの研究のはじまりのように思います。先生は、日頃から実験データとの対比から帰納的に普遍的な理論をつくり上げていくことを私どもに教示されてこられました。この当時も日立中央研究所の小松原毅一氏や学習院大学の川路紳治教授の実験グループと絶えず討議をしながら理論を進展させ、その後も安藤さんの協力を得て、川路さんをはじめ Bell, IBM, München, Grenoble, Oxford 等世界各地の実験グループと接触を深めながらこの分野の研究の指標となる理論をつくり上げられて、量子ホール効果をピークとする今日の2次元電子系の分野における研究の発展の基礎を築かれました。

先生は、MOS反転層が舞台となった2次元電子系のみならず、ひろく固体物理学の発展のために指導的役割を果たしてこられました。今後ますますお元気で、先生のモットーである物理を楽しんで頂き、物理学の発展のために御活躍頂きたいと存じます。

小林英司名誉教授の学士院賞受賞によせて

— さかなのしっぽ —

江上信雄(動物)

小林名誉教授は昭和14年に理学部動物学科に入学されました。学部学生の頃の実習で、メダカ尾ヒレ再生能力について指導された、岡田要・竹脇潔両先生を感心させるような見事な実験をして、新事実を発見されたときいています。卒業研究として、カナリヤの羽の抜け代りが甲状腺や生殖腺のホルモンにどのように支配されているかを解析した素晴らしい仕事を残して、兵役につかれました。戦後直ちに動物学教室に戻り、設備も貧弱な

実験室で、ハト、ヒキガエル、ドジョウ、ネズミ等多くの材料を自ら飼い、朝早くから夜遅くまでエネルギーに研究をしておられた姿は、我々後輩にとって何にもかえがたいお手本でした。昭和32年最初に渡米されてからは外国生活が長く、その後もほとんど毎年のように世界の各地に研究や講演に出かけられ、比較内分泌の分野で世界的な第一級研究者としての地位を確立されました。同時に国内に於ては、先生は日本の比較内分泌学の

先達として、若い研究者の育成に努力され、着々とその基盤を築かれて、現在の日本の比較内分泌学の隆盛をもたらされました。

最近の脳の視床下部の神経分泌に関する比較内分泌学的研究は、電子顕微鏡による形態学的裏づけの下に、多くの専門家と共同していろいろな生化学的・薬理学的アプローチを行なわれたもので国際的評価の高いことは申すまでもありません。新しい研究方法を積極的にとり入れ、また世界各地の専門家と手を組み、活発に仕事を進めていかれる先生の姿勢は、40年前に先生に最初にお会いした時の印象から、まさにピタリと予想された感じがしています。そういえば、魚類の尾部に下垂

体があり、そこにある血圧降下物質の存否を指摘し高濃度のアセチルコンを発見されたユニークなお仕事の続きは、現在も先生の御研究の一つの柱であります。このことは、大学で最初にはじめられたテーマがメダカのしっぽに関係していたことと、何かの因縁があるのかかもしれません。「梅檀は双葉より香し」という言葉がありますが、今回の受賞のニュースをきいて、「研究者魂とか、先駆性というものはかなり生得的で、個人が生涯持ちつづけているものであり、後天的に得られるだけではない。」というような感慨を持った次第であります。

植物園の2月半

岩槻邦男(植物園)

植物園が現在の場所で薬園として出発してから来年で300年になります。ヨーロッパには、それより歴史の古い植物園がいくつかありますが、東大植物園はそれらに肩を並べるだけの歴史をもっているという計算です。植物園では、樹木が生長し、安定した植生を保ち、それではじめて多様な植物の種の生育の場が確保されるのですから、歴史の重みに現在の意味があります。日本の近代植物学の一世紀の歩みの中に占める東大植物園の位置も、他に較べるものもない程です。その歴史を通じて、国際的に貴重な資料標本や文献資料の蓄積をみたことも、植物園の特長で、これはたとえ巨額の資金と多数の人手を投入しても、短期間には整えることのできない財産です。最近、資源としての植物を見直さなければ、という声を聞きます。地球上に30万種も生育している植物のうちから、どれが役に立つものかを見出すためには、それらの植物の間にもどのような差異や類似があり、

それは進化の歴史のうちにもどのように確立されてき、どのような機能上の意味をもつかについて比較研究をすることが基礎的な研究として最も必要なのですが、その研究のためには植物園にある植生と資料類は極めて有力な戦力という訳です。もっとも、それは必要条件の一つが充たされているということで、条件が完備されているのではないといわねばならないことは残念なことです。

1978年から始められている野生植物種子胞子の長期保存に関する研究は、着眼点でも方法でも、国際的に話題を呼ぶことは必至のものですが、長期保存の影響を明らかにするためには長期間の継続観察を必要とするのは当然で、やっと基礎データが出せるようになりますが、この研究も現在のような小さな規模でやっていたのでは、すぐにアイデアを盗まれて、規模の大きいどこかの機関が成果を我がもの顔にしてしまうのかもしれない。

こちらの専任にならせていただいた早々から、こ

の建物では現在風の研究の設計は難かしいから、と建物改修のお願いをしたり、せめて下草刈り以上に植物の育成に手が廻るよにもう少し、と予算の増額の方策を検討したり、グランド代りに入園してくる子供達にどのように植物園を利用してもらうべきかを考えたり、と、植物学に直接は関係のないことばかりやっておりますと、折角の施設や資料を生かすことは一寸もならないのではないかと反省しきりなのが2ヶ月経った今の率直な感じでした。

研究の上では、これまで主として東南アジアをフィールドにして植物相の調査研究に携わってきましたし、シダ植物を対象として、系統分類学的研究を行ってきました。植物が30万種にも多様化しているのは長い進化の過程を経てきたからであり、生命のもつ歴史的側面を解析する手掛りとしては生物の多様性は最も具体的な事実です。分類学という言葉のもつ静的なイメージでなく、植物の種や系統の分化を追究し、植物相の成立の過程をあとづけることで生命というこの最も神秘的な存在の最も興味のある一面に迫ることは科学的な好奇心を強くかき立ててくれることです。そして、多様な植物を対象とする研究が行なわれるべき場として、植物園を生かすことは研究上も必至のことといえます。

都心に16万㎡の場所が緑に包んであれば、東京大学の用に供するだけというのはもったいない話です。研究教育上の必要から確保される多様な植物は、その多様さを通じて生命のもつ歴史的な側面を見せてくれます。それを見る眼を開かせるためには一寸したきっかけがあれば充分です。折角準備された多様な植物を使って、そのような社会教育を施すことは植物園が果すことのできる附加的な効能といえるでしょう。しかし、ここしばらくの間入園してくる人達の挙動を見ていると、甚だしく厭世的な気分には追いやられることがあります。植

物園は庭園よりももっと広場的要素が大きいものと、一般には受け取られているのでしょうか。見廻りの要員も充分でない現状では、大切な材料が傷められても、極端な場合いつの間にか見当らなくなっているよりも、黙って目をつむっているより術がないのでしょうか。

300年の歴史は植物園にとって得難い宝です。しかし、広場として使ったのでは宝のもち腐れということでしょう。研究教育のために準備された多様な植物は、慌ただしい都心の一角に緑の空間を作ります。その空気を味わう場として活用されれば、植物学の研究業績が上げられるのと同様に、植物園に佇んで思索することが、データの製造に追いつかされている日常の科学を止揚して、真に独創的なアイデアを育てる泉ともなってくれることでしょう。明日の植物園が、植物学の材料の苗床であると同時に、ノーベル賞級研究のためのアイデアの温床ともなるように有効に利用できるようにしたいものです。

学生時代から30年間一貫して籍を置いていた京都大学から転任して参りますと、いろいろと当惑したり面喰ったりすることがあって慌てます。しかし、一番よく似ていることが、研究そのものではないことに費す時間が多いことであるというのは何とも残念な現実です。いろいろの用事の合間に研究をするというのは研究者の在り方としては異常なことです。これは個々人の自覚では解消できないことだけに、何だか恐怖にとらわれます。

京大で理学部弘報のお手伝いをしていた頃に、何かと参照することの多かった「広報」に寄稿することになって、最初を書くことにはしては現実の酷しさに触れることが多過ぎて残念なのですが、この次の機会には、大きな成果をうたい上げ、次への飛躍に向けて夢と希望に充ちた文が寄稿できるようでありたいものと念じます。

理学部長と理学部職員組合の交渉

学部長と理職の5月定例交渉は、5月19日理学部会議室でおこなわれた。主な内容は、以下のとおりである。

1. 理職の教室使用手続きの簡略化について

理職側から「代議員会等で教室を借用する際の手続きを簡略化してほしい」との要望があった。これに対して学部長は、「手続き上必要な紹介者を学部側の方で2名程度あらかじめ用意しておくことはどうか」と提案した。この問題は、さらに両者で協議がつづけられる。

2. 大教室事務室主任を2名化することについて

理職は、「物理学教室は、職員数のうえでは部局並みでありながら事務室主任はわずか1名である。少くとも2名にして、6等級高位号俸者の昇格をはかったらどうか」と主張した。これに対して、学部長は「主任2名化は6等級高位号俸者の昇格問題の解決方の一つではあるが、現段階では難しいようである。」「他の方法をふくめて解決のために努力したい。」と答えた。理職から重ねて主任2名化のために、学部長が努力することを要望した。

交渉は、上記の件以外にも、6等級主任の5等級昇格問題、期限付定員外職員の雇用問題、60才定年制施行に伴う退職者の特昇問題などについて議論された。

なお、紙面の都合上前号で紹介できなかった交渉内容のうち、「東大における昇格の改善」について今号で補足する。

3. 東大における昇格の改善について

東大における行政職（一）の昇格が他省庁や本省に比べて著しく遅れているという実態（例えば、文部省の場合、4等級以上が41.5%、理学部の場合3.8%）が理職より提出された（3月交渉）。理学部側からもほぼ同様の理学部職員の調査結果が提出され（4月交渉）、両者で東大の昇格実態について議論された。その結果、こうなった理由は別として「現時点で、東大の昇格が他省庁等の同等機関に比して、差がある」という認識で両者は一致し、学部長は「4等級以上の定数枠拡大もふくめて必要な措置がとられるよう努力する。」とのべた。（4月交渉）

◎泥棒がねらっている（盗難注意）！

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒（盗難）の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～

<学部消息>

教授会メモ

5月18日(水)定例教授会
理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 企画委員会報告
(5) そ の 他

6月15日(水)定例教授会
理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 寄附の受入れについて
(4) 人事委員会報告
(5) 会計委員会報告
(6) 教務委員会報告
(7) そ の 他

(次回以降開催予定は、7月20日(水)、9月28日(水)いずれも13時30分より、理学部4号館3階会議室(1320号室)です。なお、8月は休会です。)

理学部委員会委員名簿 (順不同)

昭和58・5・18現在

【学部関係】

委員会等の名称	氏 名(所属)・〔。印は長〕	任 期(年)	備 考
企 画 委 員 会	◦西島(物)、田丸(化)、田村(数)、飯野(植)、海野(天)、飯山(質)、有馬(物)、大木(化)、宮沢(物)、和田昭(物)、後藤(情)、会計委員長・小嶋(球)〔山崎(物)〕	58. 4. ~	
人 事 委 員 会	◦宮沢(物)、宮沢(生)、高倉(天) 花井(質)、水野(動)、朽津(化)	~ 59. 3. 31 (2) ~ 60. 3. 31 (2)	
会 計 委 員 会	◦小嶋(球)、宮本(物)、藤田(数) 田隅(化)、尾本(人)、上田(動)	~ 59. 2. (2) ~ 60. 2. (2)	
教 務 委 員 会	◦高橋(動)、井上(生)、武田(鉦) 前川(情)、杉ノ原(球)、落合(数)、橋本(物) 〔佐佐木(化)〕	~ 58. 9. 30 (2) ~ 59. 9. 30 (2)	
広 報 委 員 会	◦尾本(人)、露木(化)、松野(球)、矢崎(物)、田賀井(鉦)	58. 4. ~	

委員会等の名称	氏 名 (所属) ・ [。印は長]	任 期 (年)	備 考
学 生 委 員	有馬(物)		
紀 要 委 員 会	。高橋(動)、伊原(数)、花井(質)、埴原(人)、 岩槻(園)		
環境安全委員会	。稲本(化)、飯田(物)、武田(鉦)、井上(生)、 久保(理) ~ 58. 7. 31	58. 4. ~	
放 射 線 管 理 委 員 会	。富永(化)、中井(物)、駒嶺(植)、溝淵(生)、 脇田(穀)、小橋(化)	58. 4. 1 ~	
企画委員会建物 小 委 員 会	。大木(化)、伊藤(数)、小林俊(物)、富永(化)、 古谷(植)、米田(情)、高倉(天)、飯野(植)、 和田昭(物)		石渡・神戸・ 福井・三浦 俊(事務部)
企画委員会第二 キ ャ ン パ ス 小 委 員 会	。有馬(物)、宮本(物)、和田昭(物)、古谷(植)、 飯山(質)		
企 画 委 員 会 コ ン ピ ユ ー タ ー 小 委 員 会	。後藤(情)、小柴(物)、有馬(物)		
理 学 研 究 国 際 交 流 セ ン タ ー 準 備 委 員 会	。大木(化)、藤田(数)、後藤(情)、二宮(物)、 上田(動)		
組 換 え D N A 実 験 安 全 委 員 会	。和田昭(物)、岡田(生)、鈴木(植)、富永(化)、 堀田(物)		
発 明 委 員 会	。不破(化)、山田(情)、山崎(物)、露木(化)、 酒井(生)、久城(質)、石渡(事)		
百 年 史 編 集 会 委 員 会	。飯田(物)、伊藤(数)、堀(天)、佐藤(球)、 田隅(化)、溝淵(生)、水野(動)、佐藤(植)、 遠藤(人)、花井(質)、武田(鉦)、阪口(理)、 後藤(情)、重井(臨)、[*大場(園)]、 福島(施)、石渡(事)		※ 総合研究資 料館
視 聴 覚 小 委 員 会	高橋(動)		
図 書 委 員 会	。岩堀(数)、国井(情)、和田靖(物)、桜井(天)、 新田(球)、黒田(化)、荒田(生)、代谷(動)、 笠原(植)、西田(人)、鎮西(質) [兼(鉦)] 鈴木(理)、石渡(事)	~ 59. 3. 31 (2)	
素 粒 子 物 理 学 国 際 協 力 施 設 会 運 営 協 議 会	。江上(動)、田村(数)、海野(天)、小柴(物)、 宮沢(物)、宮本(物)		西川(高工研) 山口(核研)

委員会等の名称	氏 名 (所属) ・ [・印は長]	任 期 (年)	備 考
素粒子物理学 国際協力施設 運営委員会	西島(物)、藤井(物)、山崎(物)、小柴(物)、 宮沢(物)、宮本(物)、山本(物)、釜江(物)、 折戸(物)、戸塚(素)、山田(素)		
中間子科学実験 施設運営協議会	◦江上(動)、田村(数)、海野(天)、宮沢(物)、 山崎(物)		西川(高工研)
中間子科学 実験施設 運営委員会	◦宮沢(物)、山崎(物)、小柴(物)、藤井(物)、 中井(物)、釜江(物)、山本(物)、折戸(物)、 永宮(物)、近藤(化)、永嶺(中)、小林俊(物)		
分光化学 センター 運営委員会	◦黒田(化)、竹内(鉍)、古谷(植)、和田昭(物)、 田隅(化)、不破(化)、稲本(化)、宮沢(生)		
遺伝子実験 施設運営 協議会	◦江上(動)、田村(数)、飯野(植)、和田昭(物)、 岡田(生)	58.5.18 ~ 60.3.31(2)	
遺伝子実験 施設運営 専門委員会	飯野(植)、堀田(物)、溝淵(生)、鈴木(植)	58.5.18 ~ 60.3.31(2)	

昭和58年度科学研究費補助金理学部採択件数一覧

研究種目	申請件数	採 択 件 数		
		新 規	継 続	計
がん特別研究(1)	2	2		2
がん特別研究(2)	3			
自然災害特別研究(1)	(1) 2		1	1
自然災害特別研究(2)				
環境科学特別研究(1)	3	3		3
環境科学特別研究(2)	1			
エネルギー特別研究 (エネルギー(1))				
エネルギー特別研究 (エネルギー(2))	1			
エネルギー特別研究 (核融合(1))				

研究種目	申請件数	採 択 件 数		
		新 規	継 続	計
エネルギー特別研究 (核融合(2))	2	2		2
特 定 研 究 (1)	(1) 8	6		6
特 定 研 究 (2)	25	12		12
総 合 研 究 (A)	(10) 31	8	10	18
総 合 研 究 (B)	5	2		2
一 般 研 究 (A)	(6) 17	4	6	10
一 般 研 究 (B)	(10) 53	15	10	25
一 般 研 究 (C)	(8) 101	35	8	43
奨 励 研 究 (A)	56	38		38
試 験 研 究 (1)	5	2		2
試 験 研 究 (2)	(4) 17	5	4	9
特別推進研究(2)	(1) 1		1	1
計	(41) 333	134	40	174

・ () は継続の件数を示し、内数である。

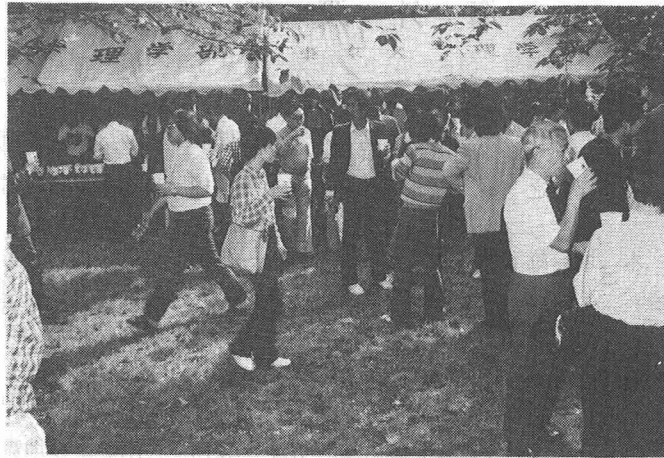
毎月 1 日は
「省エネルギー」
の日です。

第19回教職員・学生懇親会

本学部恒例の教職員と学生の懇親ビヤパーティが今年もさる5月9日(月)午後3時より、本学部附属小石川植物園で行われた。

さいわい快晴に恵まれ、緑したたる園内には、名誉教授、教職員、学生およそ900名の参加があり、江上学部長、岩槻植物園長の挨拶について、鈴木秀次教授の乾杯ののちパーティに移った。

各々ビールとつまみを手にあちこちの樹の下に、芝生の上に新緑とビールを満喫しながら懇親の輪がいくつもつくられた。用意されたビールやジュースは好天も手伝って、予想以上にはやく飲み尽くされ、終始和やかに、賑やかなうちに午後5時前散会した。



人事異動報告

58. 6. 17 現在

所 属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
(講師以上)					
情 報	助教授	川 合 慧	58. 5. 16	昇 任	情報科学科講師より
物 理	"	池 畑 誠一郎	58. 6. 16	"	物理学科助手より
(助 手)					
化 学	助 手	菱 田 俊 一	58. 5. 16	配置換	東大(工)助手より
地 質	"	河 村 雄 行	58. 6. 1	配置換	岡山大(温泉研)助手へ
物 理	"	三 田 常 義	58. 6. 10	辞 職	
物 理	"	桑 田 真	58. 6. 16	採 用	
(職 員)					
事 務	事務官	飯 澤 隆 夫	58. 6. 1	配置換	文部省(学際局)へ

羽鳥図書掛長国立大学図書館協議会賞を受賞

去る6月9・10日札幌市で開催された第30回国立大学図書館協議会総会において、理学部図書掛長羽鳥浅子氏が、「図書館学における研究業績」(件名=数学分野のData Base SOLID-Mの作成——国際会議録・議事録について)により、昭

和58年度の国立大学図書館協議会賞(1件)を受賞しました。

これは、数学教室図書室のグループで数年来と取り組んできた業績が評価されたもので、このシステムは他の学科等にも汎用性があるものです。

海外渡航者

5 月

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
物理	助手	小野 嘉之	ポーランド	5.1～6.12	半導体における磁気輸送の理論の研究実施のため
物理	教授	鈴木 増雄	ベルギー フランス	5.9～5.22	物理系におけるノイズの第7回国際会議および1/Fノイズに関する国際会議出席ならびに統計力学の共同研究のため
数学	助手	鈴木 貴	ソビエト連邦	5.14～6.3	スリム・リュール逆問題に関する調査・研究のため
地殻	助教授	脇田 宏	イタリア	5.1～5.15	火山および地震活動の地球化学観測に関するイタリアーソ連シンポジウム出席のため
情報	教授	國井 利泰	アメリカ合衆国	5.19～5.28	IEEE傾向と応用'83会議出席およびソフトウェア構成法、グラフィクスに関する研究討論のため
地物研	教授	福島 直	アメリカ合衆国 ドイツ連邦共和国	5.23～6.12	MAGSAT 国際共同研究最終会議及び国際測地学、地球物理学連合傘下各協会事務局長会議出席のため
素粒子	助手	蓑輪 真	ドイツ連邦共和国	5.4～5.31	e ⁺ e ⁻ 相互衝突装置「PETRA」及びe ⁺ e ⁻ 測定装置「JADE」による万能型測定装置及び測定のためのソフトウェアの調査研究のため
素粒子	助手	武田 広	ドイツ連邦共和国	5.4～5.31	同上
物理	教授	有馬 朗人	アメリカ合衆国	5.1～5.12	デルター原子核力学に関するシンポジウム出席及び原子核理論に関する研究連絡のため
物理	教授	藤井 忠男	アメリカ合衆国	5.18～5.27	第15回日米高エネルギー物理学委員会出席及び高エネルギー物理学に関する協議のため
数学	助教授	大島 利雄	フランス	5.14～6.18	ユニタリ表現論の研究及び調和解析に関する国際会議出席のため

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
植物	教授	飯野徹雄	アメリカ合衆国	5.24～5.29	第4回日米合同ワークショップ「組換えDNA研究の医学への応用」出席のため
物理	教授	山崎敏光	スイス	5.15～5.24	ミュオンスピン実験に関する春の学校出席のため
地質	助教授	島崎英彦	大韓民国	5.25～6.6	大韓民国の金属鉱床の調査・研究のため

6 月

物理	教授	鈴木秀次	チェコスロバキア オーストリア ドイツ連邦共和国	6.10～6.24	結晶欠陥の構造と性質に関するシンポジウム出席及び金属物理学の研究動向調査のため
植物	助手	広瀬忠樹	アメリカ合衆国	6.10～9.10	植物の個体群生態学、進化生態学の研究のため
植物	助手	杳掛和弘	アメリカ合衆国	6.7～9.6	DNAの再編成機構の共同研究のため
物理	助教授	永宮正治	ハンガリー シンガポール	6.3～6.19	高エネルギー核物理国際研究集会及びアジア太平洋物理学シンポジウム出席のため
物理	教授	鈴木増雄	シンガポール	6.11～6.19	アジア太平洋物理学国際会議に出席のため
物理	教授	清水忠雄	ドイツ連邦共和国、カナダ	6.22～8.21	レーザー及びレーザー分光学の研究のため
物理	教授	平川浩正	イタリア	6.30～7.10	一般相対論と重力に関する第10回国際会議出席及び相対論の実験に関する研究打合せのため
化学	教授	田丸謙二	アメリカ合衆国	6.14～7.14	ゴードン・コンファレンス出席及び触媒化学に関する調査・研究のため
地物研	助手	山本隆	アメリカ合衆国	6.1～5.31	粒子一流体計算機シミュレーション計画に参加するため
情報	教授	後藤英一	シンガポール	6.12～6.18	アジア太平洋物理学学会に出席のため
物理	助教授	塚田捷	ドイツ連邦共和国	6.18～9.19	固体表面物理学に関する研究のため
物理	教授	山崎敏光	ギリシャ	6.25～7.11	ガンマ線、エックス線のスペクトロスコピーの最前線に関する欧州物理学学会及び第6回超微細相互作用国際会議出席のため
物理	助教授	中井浩二	スイス ハンガリー	6.2～6.19	高エネルギー原子核反応と原子核のフォーク構成子の構造の研究及び相対論的原子核・原子核衝突に関するワークショップ出席のため
物理	教授	山崎敏光	シンガポール	6.12～6.19	アジア・太平洋物理学会議出席のため
物理	助教授	折戸周治	シンガポール	6.11～6.19	アジア・太平洋物理学シンポジウムに出席のため
地物研	助手	岩上直幹	アメリカ合衆国	6.2～6.16	大気球による大気観測のため

所属	官職	氏名	渡航先名	渡航期間	渡航目的
化学	教授	向山光昭	フランス 連合王国	6.22～7.24	ケンブリッジ有機合成化学会議出席 及び有機合成化学に関する調査研究 のため
物理	助教授	小林俊一	シンガポール	6.11～6.19	アジア・太平洋物理学シンポジウム 出席のため
物理	教授	有馬朗人	シンガポール	6.11～6.18	同上
物理	教授	有馬朗人	アメリカ合衆国	6.19～6.27	ゴードン会議出席のため
物理	助教授	中井浩二	アメリカ合衆国	6.26～7.7	第6回高エネルギー重イオン研究会 出席のため
物理	教授	二宮敏行	シンガポール	6.11～6.16	固体物理分野における研究者交流プ ログラムについての打合せ
数学	講師	加藤和也	アメリカ合衆国	6.12～6.18	代数的K理論集會出席のため
物理	助教授	江口徹	シンガポール	6.15～6.20	アジア・太平洋物理学シンポジウム 出席のため
化学	教授	不破敬一郎	オランダ フランス	6.22～7.9	第23回国際分光学会出席及び無機化 学に関する研究連絡のため
化学	助教授	原口紘炏	オランダ 連合王国	6.22～7.9	同上
天文	教授	海野和三郎	中華人民共和国	6.27～7.7	国際共同研究「恒星の太陽物理学」 の研究実施のため

○誤植のおわび

編集担当交替により不慣れ、不注意のため前号（昭和58年5月、15巻1号）文中に、次のとおり、誤りがありましたので、おわびし訂正します。

頁	行目	誤	正
1	13	木村健二郎教授	木村健二郎名誉教授
6	11	勤続手当支給月	勤勉手当支給月
7	4	関連した のである。、	関連したものである。
11	29(下3)	事務長補佐（総務担当）神予和雄	事務長補佐（総務担当）神戸和雄

あなたです！

火事を出すのも

防ぐのも

編集：

矢崎 紘一 (物理)	内線	4 1 2 3
松野 太郎 (地物)		4 2 9 9
露木 孝彦 (化学)		4 3 5 7
田賀井 篤平 (鉱物)		4 5 4 4
尾本 恵市 (人類)		4 4 8 2
